

## 外国気象学者との諸会合

国際数値予報シンポジウム参加のため外国の気象学者が多数来日するので、これを機会に下記のような種々の会合が開かれる。

主 題	日 時	場 所	主 な 参 加 者	主 催
数 値 予 報	11月14, 15日	都市センター	Mount, Hesse, Arnason, Pfeffer, Holl, Fletcher, Bedient, Namias, FjØrtoft, Döös, Reiser (又は Hollmann), Phillips, Penn, Thomasell	気 象 庁
数 値 予 報	11月16日	気 研	Lorentz, Mintz, Mount, Hollmann, Smagorinsky, Phillips, Pfeffer	気 研 予 報
高 汐 数 値 予 報	11月上旬	未 定	Platzman	気象庁海洋気象部
大気乱流と拡散	11月16日	学 士 会 館	小倉, Wippermann, Bolin, Estoque, van Isacker, Wurtele (予定)	大気乱流グループ
メ ソ 気 象	未 定	未 定	藤田	気 研 台 風
公 開 講 演 会	11月14日18時	読売ホール	Charney, "Cyclone"	読売新聞社

### 予 報 官 の 勘

天気予報の方法を客観化し、経験や勘を追放し、科学的に予報を出そうというのは予報技術者の理想である。そして現実にもその方向に進んでいる。しかし、だからといって予報官の経験や勘は無用の長物であろうか、どうも理想にあまり忠実になりすぎ、勘のよい、経験を積んだ予報官は何となくひけ目を感じているようにみえる。

天気予報の客観化は理想であるが、現実の天気予報となると、もっとも進んだ数値予報でも、この理想からははるかに遠い。現在の数値予報はスケールの大きい気象現象の予報に相当程度成功しただけであり、スモールスケール、数日先の予報には成功したとはいえない。一般の庶民には局地の天気予報が当てられなければこまる。また、天気予報は当てられればよいので、その方法はどうでもよい。すばらしく勘のよい予報官がいて、空模様だけを見て適格に天気予報を出してくれるならばそれでもよいはずである。むしろ、その方が金がかからなくてよいだろう、予報官はやはり経験をもち、勘のよいを尊重すべきである。

しかし、だからといって天気予報の客観化を否定するものではない。また、一口に勘といっても二種類はあ

る。ただそんな気がするという動物的な勘は科学の立場からは追放すべきであろう。しかし一口に勘といっているものにもう一つ別のものがある。

たとえば台風の進路の予報を考えてみよう。現在の技術水準では風、温度場、雨などあらゆる要素を入れて台風の運動を解くことは出来ないで、単純なモデルにおき代えて予報する。現在の台風の数値予報ではたとえばバロトロピック、断熱と仮定して計算する。多くの場合はこれで充分であろう。しかし、現実にはこの仮定が成立しない場合もある。勘のよい予報官は、その違いを簡単に分析的に表現は出来なくとも、仮定の当てはまらない場合を知っている。このような場合には経験則になるかもしれないが別の予報法を用いて予報する。この判定が予報官の勘である。将来技術がすすめば、このような判定を客観化することは原理的には可能と思うが、現在では出来ない。この種の勘は尊重すべきである。これを排除する態度の方がむしろ非科学的といわねばなるまい。この種の勘は予報官の生れつきもあるが、勉強することによって初めてえられるのである。(K. T. 生)